

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 2 月 5 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520408

研究課題名(和文) 朝鮮近代文学の形成過程に関する研究 - 日本(語)との影響関係を中心に -

研究課題名(英文) Researches into the Formation of Modern Korean Literature -- Focusing on the Influence of Japan and the Japanese Language

研究代表者

布袋 敏博 (HOTEI, TOSHIHIRO)

早稲田大学・国際教養学術院・教授

研究者番号：30367122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本、韓国、米国各地に所蔵されている新聞・雑誌等の調査、資料の読み合わせ・分析を行なったが、新聞は分量が多く、すべてを終えることはできなかつたので、課題として引き続き調査・分析作業を行なう。それにより、近代文学語として、朝鮮語が成立してゆく過程を明らかにできるであろうと思われる。また、李光洙の研究が進み、文体創出や時代意識で傑出していたことが確認されたが、彼一人に帰することはできない。同時代の留学生南宮璧や金東仁など、留学生全体をより深く詳しく考察する必要性を指摘した。また、2度の国際シンポジウムを開催したが、これにより朝鮮人留学生が、朝鮮において近代文学形成に果たした役割が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Previously, I carried out a survey, analysis and comparison of newspapers, magazines and other materials preserved in libraries Japan, Korea and the United States. However, the quantity of the materials has been such that I have been unable to complete this and so I wish to continue surveying and analysing these materials. By these means, I will clarify the process whereby the modern Korean literary language and the modern language itself developed. In addition, I have continued my research into Lee Kwang-su and confirmed his outstanding qualities as a writer of prose and analyst of his own time, but these qualities cannot be attributed to his genius alone. It is necessary to make a deeper and more detailed study of all the students studying abroad at that time, such figures Namu Gunbyoku and Kim Don'in. Again, I have held two international symposia which clarified the role that students from the Korean Peninsula who studied abroad played in the formation of modern Korean literature.

研究分野：朝鮮近代文学

キーワード：学之光 朝鮮人留学生 留学生雑誌 朝鮮文学 日本語 近代 文体 金史良

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、「朝鮮近代文学の形成過程に関する研究 - 日本(語)との影響関係を中心に - 」という研究課題のもとに、当時の刊行物を中心に分析作業を続けた。

### 2. 研究の目的

その目的は、「朝鮮語が、近代文学、近代思想を盛るに足る近代文学言語として発達していった過程を明らかにすること。その際に、西洋(語)や日本(語)からの影響をどのように受けたのか、もしくは多くが朝鮮語自体の自律的な発展によるものなのか、あるいは自律的な発展様相が見られるとすれば、それはどのようなものであったのか、などを、文学を通して明らかにすること。形式・形態や盛り込まれた主題ばかりでなく、言語自体として「近代」を表現する言語として発達し、「近代文学」を形成していく過程を具体的に明らかにすること」にあった。

### 3. 研究の方法

方法としては、大きく分けて、1) 当時刊行されていた新聞、雑誌、また発表された作品を総網羅し、分析すること、言葉に注目して追究すること、2) また一方、社会状況などに着目し、留学生の活動、果たした役割などを追跡すること、の2つが考えられ、本研究でもそうした前提で研究作業を進めた。

以上を敷衍して述べれば次のようである。朝鮮の「近代」の起点をどこに取るかについては、当然ながら分野によって多少の差異があり、それぞれ研究成果が発表されてきている。文学においては、何よりもそれを実証する作品がなければならず、その意味で、「近代」を捉える観点によっていくつかの見解が出されてきている。これは主として、「小説」作品に焦点をあてて「近代文学」の起点を探ろうとしたもので、これまでの既存の韓国を中心とした近代文学研究にあってとられてきた分類法である。

一つは、李人植の「血の涙」(1906)を嚆

矢とする新小説類から始まるとするもの、一つは、李光洙の「無情」(1917)を、そうした新小説類の集大成であり、近代小説の出発点と捉えるもの、また一つは、啓蒙主義的な李光洙の作品を排し、芸術至上主義的な作品創造を主張し実践した金東仁たちの作品群(1920年前後)を出発点と捉えるもの、などである。

ところで、近年の研究では、単に作品のみならず、言語自体にも注目をし、19世紀末から刊行された新聞の論説などにその萌芽を見出す見解も出されてきている(金栄敏・延世大学教授など)。申請者もこうした見解に同意する者である。ただ問題は、そこに表われた文体が、どのようなものであるのか、長い朝鮮文学の歴史の中で捉えたとき、「近代思想」「近代文学」を表現するにふさわしい、新しい時代の人間の思想や感情を盛るにふさわしい器たり得るようになったのはいつからのことなのか、ということである。また、それはどのようにして形成されたのか、ということである。

申請者はそうした意識のもとに、19世紀末に韓国・ソウルで日本人たちの手により発行された朝鮮語紙『漢城新報』(1895年2月17日創刊、1906年7月31日廃刊)に着目し、1992年に、延世大学に所蔵されている同紙を調査し、ソウル大学大学院で発表したことがある。これは後に大幅に加筆補充し、論文「二つの朝鮮語訳『経国美談』について」として公表した(1995~97年度科学研究費補助金基礎研究B(1)研究成果報告書『近代朝鮮における日本との関連様相』1998年1月、所収。同書pp.3~66)。

申請者がこの『漢城新報』に注目した理由はいくつかあるが、一つには、同紙が朝鮮において初めて新聞という媒体に「読み物」を掲載したという点にある。それまでの朝鮮で発行された新聞は、朝鮮人による朝鮮最初の新聞である『漢城旬報』(1883年10月~84

年10月)や、その後継紙である『漢城週報』(1886年1月~88年7月)など)には、こうした「読み物」は掲載されておらず、また、この『漢城新報』より少し遅れて創刊された、純ハングル紙としては朝鮮最初の新聞である『独立新聞』(1896年4月~99年12月)も、「読み物」は掲載しなかった。『漢城新報』は「読み物」を掲載・連載した目的は、日清戦争下の朝鮮にあって、親日的な内容の「読み物」を掲載することで、朝鮮民衆を清国から引き離し、日本側につくようにするところにあったが、その目的はともかく、こうした新聞に「読み物」を掲載するという、日本から移入された発想・形態が、後の朝鮮での朝鮮語新聞に何らかの影響を及ぼしていることは十分に考えられることである。また、後に「新小説」の嚆矢とされる「血の涙」を『萬歳報』紙に連載する(1906)ことになる李人植は、1900年に渡日後(彼の渡日については、これ以前に密航しているとの証言がある)、2年間にわたり『都新聞』(現・東京新聞の前身)で見習生として勤務した経験がある人物である。これら、日本の新聞と朝鮮の新聞発行の関連については、いま少し掘り下げた探求が必要であるが、それはともかくとしても、朝鮮近代文学の発生の温床ともいえる新聞媒体と、日本の新聞の形態との影響関係は無視し得ないものである。

問題は、そうした外形的な形態の類似ばかりでなく、そこに盛られた文体の変化がいかなるものであるのか、という点であり、それがより本質的な問題をはらんでいるといえよう。そして、新聞ばかりでなく、当時の日本への留学生たちが書き記した文章が重要である。周知のように、1876年2月の日朝修好条規締結により開国した朝鮮国は、1881年5月に紳士遊覧団を送り、そのときの随員のうち、そのまま日本にとどまった若者3名が海外留学生の最初である。彼ら朝鮮人留学生は、1895年5月に慶應の留学生たちによって

作られた親睦会を最初に、さまざまな留学生団体を結成し、その機関誌を発行する。こうした機関誌に掲載された彼らの文章・文体が重要な資料である。

こうした留学生たちの機関誌や、逆に朝鮮で刊行された学生たちの会誌は、『大韓留學生會學報』、『太極學報』、『大韓學會月報』、『大韓興學報』、『大朝鮮獨立協會會報』、『湖南學報』、『西北學會月報』、『畿湖興學會月報』、『大韓協會會報』、『西友』、『大東學會月報』、『嶠南教育會雜誌』が韓国で復刻・刊行されていて、いずれ、お貴重な研究資料である。しかし、これら以外にも、いまだ復刻されておらず入手の困難な会誌がいくつかある。下記のようなものである。

- ・『親睦會會報』(建揚元(明治29)年6月発行)
- ・『夜雷』(光武11年)
- ・『同寅學報』(同)
- ・『奨學報』(隆熙2年)
- ・『普中親睦會報』(同4年)

最初の『親睦會會報』(建揚元(明治29)年6月発行)は、上記の慶應への朝鮮人留学生たちの留学生団体である大朝鮮人日本留學生親睦会が発行した、日本で最初の留學生會報である。また、『夜雷』以下、『同寅學報』、『奨學報』、『普中親睦會報』などは朝鮮で刊行された会誌である。これらは既に復刻されている会誌に劣らず重要な雑誌類であり、これら未刊行の雑誌も視野に入れた研究が必要である。

また、新聞も、『獨立新聞』や『皇城新聞』、『萬歳報』といった新聞が復刻されているが、『帝國新聞』は影印されているものは一部であり、まだ多くの部分は未刊行のままである。さらにまた、これら朝鮮人により発行された新聞類に加えて、1894年に、日本人により創刊された国漢文体の新聞『漢城新報』も見逃

せない。この『漢城新報』は、朝鮮の新聞で初めて「読み物」を掲載し始めた新聞媒体として重要な資料であるが、これもいまだ復刻されておらず、マイクロ・フィルムに収録されたままである。

こうした雑誌や新聞に加えて、彼ら留学生たちの日記（渡日前、日本滞在中、帰国後）や書簡が残されていれば、これも重要な資料となる。ただこの日記や書簡については、一部の人間については残されているのが明らかになっているが、その閲覧がなかなか困難である。しかし、それはまた大変重要な資料であることは間違いなく、それを見ることが出来れば、本研究に大きく寄与することは疑いがない。

#### 4. 研究成果

本研究は、こうした資料類を総ざらいして検討し、そこに表われる文体変化を分析して、変化があるとすればそれがどのようなものであり、またそれらが外部からの影響を受けているのかいないのか、受けているとすれば、それはどういう経路で、どのように受けたのか、などを詳細に明らかにすること、かつ、またさらに進んで、そうした文体が、朝鮮の近代文学形成とどう結びついているのかを明らかにするところに最終的な目的を置いている。一度にはすべてを行なうことはできないので、まずこれまで収集した資料類を整理し読み込むこと、そして新たに各地に点在している資料を収集することを行なった。

その結果、今回は、上記の『親睦會會報』、『夜雷』、『同寅學報』、『奨學報』、『普中親睦會報』のうち、現在知られている限りの号のコピーを入手することができ、また、この間に影印刊行された『漢城新報』等々の資料を得た。なかでも、松田利彦氏が『松井博士記念文庫旧蔵 韓国「併合」期警察資料』（ゆまに書房、2005）として復刻した資料集第1巻に含まれていた「極秘 新韓自由鐘 第壹卷第三号 隆熙四年四月一日発行」は、

韓国併合直前に、当時日本に留学中だった李光洙が留学生仲間たちと一緒に発行した同人誌として、李光洙の回想記などでその名のみ伝えられていた幻の雑誌であったが、この発掘は画期的なものであった。これはのちに李光洙研究者の波田野節子氏が発見し、分析・紹介したが、大変貴重な資料であり、当時の李光洙と日本語の関係を知る何よりの資料となっている。

シンポジウム等により、朝鮮人留学生たちの果たした役割、特に留学生雑誌『学之光』紙上を通して、外部、ことに朝鮮本国（もちろん、当時は既に日本の植民地下にあり、「国」ではなかったが）に新しい知識、思想等を積極的に発信していた様相を改めて確認できた。

以上のように、未収集の資料を集めるという作業はある程度終えることができた。ただ、可能ならば、当時の留学生たちの書き残した日記や書簡を、あらいざらい入手するという目標は手付かずのまま課題として残された。そしてまた、それら、19世紀末から1910年代にかけて発行された公刊物（新聞、留学生たちの発行した機関誌、雑誌など）を分析し、そのことにより、「日本（語）」というものを通過する前と後の文体変化などを検討し、そこから、「近代語」としての朝鮮語が如何に形成されていったか、そしてまたそれがどのように文学作品となって現れていったかを追跡する作業は今後の課題として残された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 2件)

2013年10月26日(土)

13:30~18:00

「朝鮮近代文学、その萌芽と展開」

2014年10月25日(土)

13:30~18:00

「朝鮮人留学生たちが発信したこと -  
『学之光』を中心に」

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

布袋 敏博 (HOTEI, TOSHIHIRO)

早稲田大学・国際教養学院・教授

研究者番号: 30367122